

ったのだ。山口君の絵が身代わりになってくれたのだ。」とあります。(『文庫版のための追って書き』) その現物がまさかダンボール箱の資料のなかにあるとは思いませんでした。

ダンボール箱のなかに藤岡明義著『合冊 初陣の記(日中戦争)・敗残の記(玉砕地ホロ島の記録)』(朝日新聞出版サービス)がありました。『合冊』は二冊いただきましたので、同じホロ島戦の生還者で『ホロ島戦記／独立混成第五十五旅団砲兵隊第二中隊員の手記』の著者奥村達造さんの御息の正志さんにお送りしました。また、奥村さんには『ホロ島戦記』を藤岡さんに送ってもらいました。奇しくもホロ島戦生還者の息子さん同士がつながった訳です。

藤岡明義さんは二度召集され、一度目は日中戦争(長沙作戦)、二度目はホロ島戦でした。「初陣の記(日中戦争)」を読んで、特に感銘を受けたのは、入隊して一ヶ月後に幹部候補生志願の募集があり、藤岡さんはたった一人それを拒否されたことでした。その箇所を以下に引用します。

「我が中隊では初年兵約百名中、中学卒が四名、高専卒が一名、大学卒が一名(それは私である)計六名が有資格者である。私を除く五名が直ちに応募したのは言うまでもない。しかし私は応募しなかった。」

「日本兵の九割以上が持っていない得典を、単に学校を出ているからという理由だけで、特別に甘受することは私の良心が許さな

い。その上、この戦争は東洋平和のための聖戦なりという軍や政府の宣伝には納得できないものがある、明らかにこれは侵略戦争ではないか、そして、将校ともなれば必ず部下を持たされる。自分が納得できない戦争で、部下に死を命ずることは到底私には耐えられない。階級社会の軍隊では人の羨む道はあるが、その道をとることを、いさぎよしとしなかったのである。」

この選択の後、凄惨なリンチに見舞われるところを上官の援護によって窮地を脱します。また、中国戦線から激戦地フィリピンのパターン、コレヒドールへの転属の際、入院中の胸部疾患専門の陸軍病院がレントゲンを撮らなかつたというミスを犯し、そのおかげで転属を逃れます。しかし、二年後、玉砕地のホロ島戦へと二度目の召集になります。「初陣の記」から「敗残の記」へと歩んだ一兵士の誠実で剛直な生き様が心に焼きつきました。

送られてきた資料類のなかにガリ版刷り『敗残の記』(一九五二年)がありました。これは手記「敗残の記」を元に作られ、ホロ島戦生還者に送られたもので、この後、単行本・文庫本の『敗残の記』(一九七九年・一九九一年)となり、「初陣の記」を加えて『合冊』(二〇〇一年)となりました。その後、藤岡明義さんは二〇〇五年一月一六日に亡くなされました。八九歳でした。

残された資料を見ますと、戦後もそう経っていない時期に、よくこれだけのものを集められたものだと感嘆しました。以下、そのリストを上げます。

・池田諒「軍需部の人々」(二分冊)

・西島芳之助「独立混成第五十五旅団砲兵隊第一中隊 ホロ島玉砕記」

・「独立混成第五五旅団(菅兵団) 砲兵隊第二中隊行動概要」(同戦友会の発行で、編集者が奥村達造とあり、前記『ホロ島戦記』の著者である。)

・独立歩兵第三六五大隊「ホロ島／菅兵団 比島の足跡」

・伊奈一夫「昭和十八年以降 掌信号兵の記録／スール・サンボアンガ編」

・「ホロ島をめぐる斗い 米軍ホロ戦記」の綴り

・モロ族に関して「モロ」「ホロとモロ族」

・フィリピン、ホロ島の地図類の一束

・ホロ島慰霊の旅・生還者の集い等のアルバム

・『敗残の記』出版経緯・書評・随想

・ホロ島関係来信書・資料

(来信のなかで前出「軍需部の人々」の池田諒氏との頻繁なやりとりがある。)
等がありました。

藤岡明義さんと連絡を取ろうとして果たせなかったことが、このようにして藤岡誠さんと出会えることで実現でき、うれしいかぎりです。いざれお会いできることになると思います。これでホロ島戦関係者との出会いは三人になりました。奥村達造さんの息子さんの正志さん、お兄さんをホロ島で亡くされた伊藤美代さん、そして藤岡誠さんです。私の「戦争の記憶」を辿る旅を続けて行くこうと、さらに強く思いました。

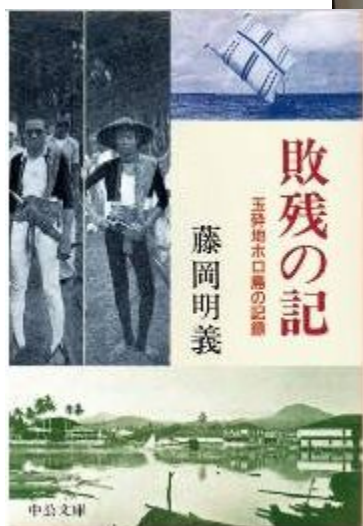
(追記)

ホロ島戦関係の私の文章は「一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像(三)」「(五)」(「反天皇制市民一七〇〇」三三号～三五号)に掲載しています。

(二〇一四・一一・一一)



ガリ版刷り『敗残の記』



1991年・「敗残の記」文庫本



ここに写っているなかで藤岡明義さんのみ生還。他は「全員帰らず」とあります。(後部左端が藤岡明義さん)

以下二図は「敗残の記」より



夢破る乱射乱鳴、闇に轉
び地に伏し護符をおのの
き握る

